

# 日本人の宗教思想とその社會史的考察

稻岡順雄

## 目次

はじめに

第一章 日本の宗教的現實

第二章 日本人の宗教思想の精神的基礎

第三章 近世における宗教思想の展開

むすび

## はじめに

今日の日本は、或意味においては、日本の歴史はじまつて以來最大の危機のなかにおかれている。日本が獨立を犯され、國民の自主が失われていくとき、われわれは、日本の社會についても、日本の人間についても、またその文化についても冷靜に客觀的にみていかなければならない。

表面的にはなるほど日本はアジアにおいては最も文化的にすぐれた國であり、ことに自然科学の一部門では西歐の先進國に對しても何らの遜色も感じないし、最近では國際政治の面においても漸く敗戰國の埒をこえて、その發言力を強めつつある。しかし率直にいつて戰前の排他的な一部の國粹論者の自畫自讃的な日本優秀論や戰後の自虐的劣等

感による日本蔑視論は問題外としても今日の日本のおかれている現状は決して満足すべきものであるとは云えない。ことに國の内外に簇出する政治的、經濟的、社會的諸問題の解決は容易なことではない。

しかし日本は地圖の上では狭小な國にすぎないが人口でいえば大國である。九千萬の生活力と創造力である日本の民族的エネルギーはそれが聰明な頭腦によつて、正當に動かされたならば將來いかに人類の文化の進展に貢獻することが出来るであらう。そしてその道を誤ることなく、平和を侵害しない文化國家の國民としてすゝむためには、日本の文化をあくまで客觀的に見ていかなければならない。しかもこの文化の基底になるものはいうまでもなく宗教である。あらゆる文化は、宗教をはなれて根本的にその存在をつゞけていくことは出来ない。過去においては勿論將來においてもその文化を創造する人間の魂の奥底にふれる宗教の問題をさしおいて、その文化の正常な發展を、期することは不可能である。

しかるに一方われわれは日本の宗教の現状を顧みると、實に心寒い思いがする事實は否定出来ないであらう。なるほど日本は宗教に對して、極めて寛容の地であり、そのあらわれとして、世界のあらゆる宗教がその處を得て繁榮し日本人の宗教生活を多彩なものにしている。しかも宗教史上においては當然異教として争鬭にまで發展しなければならぬ異質の宗教が互に矛盾撞著することなく、個人においても集團においても整然とその存在を保つてゐる。いわゆる重層信仰（シンクレティズム）の様相を示しており、その統一整理は、ほとんど不可能である。近來そのうえにこれらの古い既成の宗教に加えて、新しい諸種の宗教が簇生し、ますます宗教的混亂の傾向を強めている。しかもこれらの雑多な新舊の宗教のなかには、新しい日本文化の進展を阻止し、時には反社會的な社會解體や文化解體を促進する性格のものが少なくなく、或意味においては日本の文化の直面している極めて重要な問題がひそんでいるとも云える。かくのごとく宗教は日本文化にとつては一つの盲點であり、時には足枷となつてゐる。従つて、宗教の問題を解

決しなければ日本文化の正常な發展は期することは出来ないであろう。

日本の文化のなかにおいて宗教がかゝる様相を示している要因は、種々數えることが出来る。例えば地理的な氣候風土による民族性、或いは古來の民族文化と外來の異種文化の習合の仕方、またその後の強力な文化の歴史的變遷、さらに人爲的政治的工作、社會的基盤による影響感化などあげることが出来るであらう。しかしわれわれはこゝでは、現代の日本の宗教的混亂の問題に焦點をおいて、まず最初にその様相をとらえさらにその精神的基礎を日本人の民族性のなかに求め最後に社會史的觀點から宗教的現實を把握せんと、つとめるであらう。

兎に角かゝる批判、反省を通過しなければ日本文化のなかにおいて、今後の宗教活動は到底期待されないし、またひいては、日本文化の改造、發展と云うことも不可能であらう。かゝる批判反省は日本人が一度は通過せざるを得ない難路なのである。西歐人の目にはアジャにおいて、中國人や印度人よりも思想的には、はるかに淺薄な印象を與えるにも拘らず、日本人自身は、世界のあらゆる文化を綜合攝取したつもりであるが實は單なる無反省な、便宜主義的折衷混合狀態に墮しているくらいが少くない。たとえば雜種文化の入りこんだ植民地の場末の町に程度の高い他の文化の借りものがつきかさなつて、つぶれていると云う感が深い。われわれは、文化の面においても世界の孤兒にならんとしている日本の現狀を直視しなければならない。

## 第一章 日本の宗教的現實

一部の日本の知識人や學生、また急進的な、組織労働者やその指導者などを除いて、一般大衆の大部分は依然として宗教に多少の關心をいだき、その必要性を感じている事實が報告されている。

この事實が多數の宗教團體となり、それに附隨する老大な宗教施設であり、また國民の總人口數を上廻る信者數と

なつて統計にあらわれている。この意味から云えば日本は實に宗教の盛んな宗教國であると云うことが出来る。

また日本は、表面上は少くとも佛教國であり、國民の大部分は佛教徒であると云われるごとく、各家庭には、佛壇を安置し佛像や祖靈をまつり、その祭祀儀禮は一般に佛教的方法によつて行われている。

また地縁的には第一次集團として古來の神道に屬する神社信仰を通じて各家庭ごとに神棚を設けて、これを日常禮拜している。更にこれらの創唱的宗教や國民的宗教以外に、非歴史的な自然宗教に屬する俗信や民間信仰にも關心をいだき家庭内のみならず路上においても雑多な夥たしい諸佛諸神や宗教施設を安置している。

さらに、このほか明治以後とくに第二次大戰後顯著な現象は、西歐の宗教であるキリスト教もその資力と、熱烈な傳道心によつて、逐次國民の知識人や上層部の人々の關心をひきつゝある。

しかしこれらのうち最も注目すべきは新しい宗教、即ち新興宗教の目覺ましい發展であり、その強力な組織力と巧妙なしかも狂的な宣敎によつて、我が國民の宗教生活に著しい變革を與えつゝある。

しかもこれらの新舊を問わない種々雑多な諸宗教はその間に多少の消長はあつても、それぞれ大殿堂や大伽藍を維持し、時には新しい大宗教施設の建設さえも行われている。

しかしその反面夥しい宗教施設とそれに従事する多數の宗教家の日夜の活動にも拘らず一方では、國民の宗教生活の低調とそれにとまなう道義の頽廢がなげかれている。それではなぜかゝる精神上の缺陷が埋められずその向上が期待されず、また宗教のもつ重要な機能の一つである道德意識や内面的罪惡意識が樹立されず日本の現代文化の跛行現象を推進する一翼を宗教が擔つているかどうかを明確に考究する必要がある。そのためには、われわれはまず日本人の宗教生活の現實をあくまでも實證的に把握しなければならない。

この問題については近時新興宗教の著しい發展に對する關心からその素地としての一般大衆の宗教生活の實態を把

握せんとする機運が醸成し多くの學者がそれぞれの立場から検討を加えている。今それらの論點を要約するとまず第一に指摘される事は、宗教を信じているものゝ約半數は形式的、或いは習慣的に宗教を信仰し宗教行事を行つてゐる事が明らかにされている。即ち積極的に、宗教を求め、自發的に自己の信仰を確立すると云うのでなく、與えられたものに順應する受身の態度が日本人の宗教信仰の大きな心理的さゝえになつてゐる。

とくに家の傳統的習慣と社會的強制によるものが大部分であり、深遠な教義や哲理は、一般大衆には無縁のものとなつてゐる。

第二に明らかなことは現世利益的傾向に強いことである。この宗教における功利的側面は、必ずしも我が國のみならず世界の各民族の諸宗教にも多少認められる現象であるが、我が國の大衆の宗教生活においてはとくに著しい特色となつてゐることである。一口に現世利益と云つても、その目的は人間の欲求に従つて種々雑多であるが、そのうち最も大きな部分を占めるものは病氣である。自己のみならず肉親、知人の病氣はすべて肉體的苦痛や死の恐怖のみならず同時に貧しい大衆には生活苦の前提となつて現われてくる。従つて貧しい大衆や科學的療法に不信をいだく人々は極めて、容易に宗教的方法によりかゝる。現代の新興宗教の發生の最も大きな素因の一つとなつてゐるのは病氣に對する現世利益的祈禱であつた。

さらにまたこのほか、貧苦や爭鬭不和を回避して、一家、一個人の平和と安全を願う心情も強く、我が國の宗教をして現世利益の方向へ推しやつてゐる。ことに生業の破綻から來る精神的物質的苦痛へのおそれを反對に積極的に、その成功と發展を祈る心情が現世利益的宗教を求めるようになる。

第三には、呪術的であると云うことがあげられる。これはアニミズムやシャーマニズムと關連して、東洋の宗教に著しい特色となつてゐるがさきにあげた宗教による現世利益の成就も多くは、これと表裏一體をなしている。例えば

病氣に關連して、その治癒を宗教によつて達成せんとすることや貧困、不和を、信仰によつて脱出せんとする意欲は我が國の宗教生活において特に著しい。

神道は勿論佛教信仰も多くは、古來からの民間信仰である、祖先崇拜や死者崇拜と結びつき、曖昧な祖靈觀念としての死者や「ほとけ」のたゞりやさわりを回避し、それを宥和する機能が強<sup>は</sup>く、いわゆるお<sup>は</sup>けや讀經おまつりなどの儀禮はすべて、かゝる目的のもとに行われていると云つても過言ではなからう。たとえ、祖先や死者の冥福を祈りまた、報恩感謝の念から行われた禮拜であつてもその裏面には、祖先や死者の呪咀や怨恨や祟りに對する恐怖心が潜在している事は否定することは出来ない。

かゝる日本人の宗教生活とその心的態度に照應する宗教的對象、即ちいわゆる我が國の神祇觀念も極めて不明確であり、歐米に見られるごとく絶對的超越神の存在の觀念は稀薄であり、例えば死者も時には「神」となり「ほとけ」となり人間に超越的存在として受取られながらその力は人間に禍福を、與えるが儀禮を媒介として人間が或程度支配出来るものと考えられている。また、多靈的な神祇觀により、人物神あり自然神あり機能神など人間の欲求によつて要請された諸神、諸佛や外來の宗教の移入した、神祇などが混在して極めて、複雑な様相を示している。

以上日本人の宗教生活の一端を、概觀してもその宗教生活や觀念は極めて複雑であり、絶對的超越的な一神的信仰に培われた他國人には奇異にさえ、感じられるであろう。従つて、つぎにわれわれは、なぜ日本人の宗教生活がかくのごとく重層的に混亂したかの要因を探索する必要がある。

この要因として種々のものがあげられるがわれわれはこゝでは、まず第一に、日本人の精神生活にあらわれた思考作用と更に中世以後近世における歴史的社會的影響による日本人の宗教思想に焦點を向けて考察するであろう。

## 第二章 日本人の宗教思想の精神的基礎

五六

まず第一に考えられたことは、日本人は古來より個人的存在の重視よりも人と人との關係即ち人倫的人間關係を重視する傾向が強かつた事である。このような傾向が生じた原因は、いろ／＼あげる事が出来るがこれには、日本の風土による特殊な社會生活が大きく、働いていると考えられる。我が國は古來より氣象上の理由から生産様式として小農的な水田耕作による集團生活をなして社會が發展して行つた。こゝでは内において緊密に結合し、外に對しては、排他的封鎖的な人倫共同體が形成された。従つて個人としての自覺や個人の力に對する自信は極めて弱かつた。このような一小地域を中心として結合した封鎖的集團のなかに氏神信仰が成立したのである。今日においても尙この氏神を中心とした地縁的な社會組織が小さく固ろうとする傾向が強い。このように古來からの根強い傾向が漸次人間關係を重視しつゝには他人よりもむしろ有限にして特殊な人倫的組織の意義を過當に重視するようになった。従つて日本人が古來より重視した人間は、他のアジア人やヨーロッパ人が客體的に把握していたとき普遍主義的意義を有する人間でなくむしろ主として限定された。特殊の人倫組織に從屬する。即ち人と人との間柄において、把握された人間であつた。日本人の精神形態としてのこの事實は、古來からの宗教である神道は勿論、元來特殊な人間關係を、超越して個人の自覺に訴えるところの普遍的宗教である佛教やキリスト教も日本に移入以來日本人のこの人倫重視傾向から免れる事は出来なかつた。

この特殊な有限なる人間關係的人倫組織の結果としてまず重視されたのは「家」である。古代日本の氏族制社會において、その時代の唯一の民族宗教であつた。古神道によつて家の祭祀が重んぜられ、祖先崇拜が重視されていた事は明かである。この時代に於ては、祖先を同じくし、職業を共通にする血族の團體である大小の氏族は守護神として

の氏神があり、氏族社會はこれを中心として生活していたのである。

この氏族制社會が崩壊した後もこの家を重視する思想形態は、根強く殘存し、近代にいたるまで日本人の實踐を有力に支配し眞の個人の自覺を促す個人主義よりも家族主義的でありこれと天皇制が結合して、近時まで家族主義の國家體制を維持して來たのである。

従つて外來の宗教や思想を攝取する場合もこの規制から逸脱せず例えば儒教の受容においても、この家族主義に基礎をおいた、祖先崇拜に理論的確信を與えた孝の道德をとくに強調した。同様にインド思想である、佛教の場合にも古來からの祖先崇拜と結びつくことによつて、民衆一般の宗教として、ひろまる事が出來た。このため家族や國家を、超えた、立場に立つ普遍的宗教である佛教は、日本獨自の家族倫理と矛盾撞著することなく、受容せられ、これによつて、現代にまでその命脈が保たれているのである。しかも家庭において、その祭祀を行う佛壇のなかに、祖先の位牌を安置し、その周邊に神棚を設け位牌を通じて近い祖先や死者と結びつき、神棚を通じて遠祖に結びつくと言う我が國獨特な信仰形態をつくりあげたのである。ことに祖先や死者の葬儀や祭祀、その追善供養は佛教と結びつくことによつて、極めて綿密丁寧に取扱われるようになり今日の日本佛教からかゝる日本古來の習俗と結びついた儀禮祭祀を取去つたら果していかなる宗教的なるものが殘るかと言ふ極言されている。

またさきにのべた人間の倫理組織の個人に對して優越すると云う思想は、當然、その社會的表現である主從關係や身分關係重視の思想にまで發展してくる。この思想は、古くは我が國の神話のうちに見られ、後には天皇制と、結びついて今日まで長く、我が國の社會體制の基準となつていた。

従つて儒教や佛教などの外國思想の受容の場合にもこの主從的身分的社會秩序を、打破せずむしろこれを強化する方向において受入れられたのである。ことにインドにおいて根強いカースト制度打破を標榜して、勃興した佛教の根



本的立場は、我が國では、全く反對の立場において受容された。

この觀念が封建時代になると、更に恩や義理獻身の道徳に裏づけられて強化し、ついに近代においても自由主義にもとづく、個人の觀念は殆んど現われず。

さらにこの人間關係的人倫組織を重視する傾向は國家や帝王に對する觀念とも密接に關連してくる。國家を最高至上の存在として絶對視し、神聖視する思想は極めて古くから存在し、それが遂には明治以後に天皇制と結びついて頂點に達した。さらにその主宰者である國王、帝王崇拜の觀念は第二次大戰までの現人神としての天皇崇拜にまで達した。しかしこの國王帝王に對する宗教的態度は、古くは、古代日本の特定個人に對する絶對歸依の觀念に基礎づけられており、個人存在を絶對視しその威光に服する態度は遂にカリマスの段階にまでいたり、これが今日においても特定教團の教祖や宗祖に對する信者の絶對歸依の態度にあらわれ、ことに新興宗教の教祖に對する信者の態度にその典型を見ることが出来る。合理的な組織や歴史をもたない新しい宗教が教祖の死亡によつて、教團が分裂し衰亡する事實が少くないことはこの間の事情を物語るものと云える。

以上述べたことは、結局日本人は國家や家や帝王、またそれに伴う主從關係などのごとき有限にして、特殊な人間關係即ち人倫組織を重視し、その立場から在來の宗教は勿論、普遍的世界宗教をも變容して受入れたのであり佛教は勿論キリスト教に對しても同様の態度をもつてのぞんだのである。兎に角日本人には宗教の尊さに對する自覺は極めて淺薄であり丁度日本語の「カミ」と云う言葉が示すごとく西歐の「神」が人間の人倫組織に至上命令を與えて規定するのとは異り、むしろ反對に、家や祖先、國王などの權威を絶對視するための手段として、宗教を利用し從屬せしめたとも云える。

この事實は日本の諸宗教の歴史を、顧みれば自ら明かであり古來から今日にまで遂に統一された強固な教團を形成

し得なかつた神道は勿論、儒教や佛教においてもその例外ではなかつた。日本においては宗教が常に宗教以外の權力によつて左右され、古代や中世は云うまでもなく、とくに近世における、徳川幕府の宗教政策とそれを觀念的に受けついで明治政府の宗教に對する、政治的態度においても常に爲政者が宗教の權威と尊嚴を認める代りにそれを利用し懷柔し時には抑壓すると云う過程を繰り返していたことが今日の宗教的混亂をひきおこし、また、日本の宗教の性格と云われる封建性や古代性、原始性ひいては停滯性の原因の一つとなつてゐる。

尙このほか、日本宗教にこのような非近代的性格を、もたらした精神的基礎として、あげられるものに日本人の非合理的、思考作用と呪術とシャーマニズムである。

まず日本には、古來より眞の意味での論理學が發達しなかつた理由として、言語學者は、これを日本語の特異性によつて理解せんとしている。即ち日本語は、事物や事象のあり方の様々の様態を嚴密に正確に表示しようとしないうで漠然と類型的に、表現するに満足している點を指摘している。例えば名詞についても單數複數性の區別もなく、從つて冠詞も伴わず動詞にも人稱や數の別がない。たゞ日本獨特のいわゆる「てにをは」即ち助詞の用法によつて、多少知的論理的な關係ととくに微妙な情意上の區別を表現しておりこれに加えて助動詞の數の多さや用法の複雑さによつて、日本語の綿密鋭敏な情意的把握を示している。また、日本語は感情的感性的な精神作用を示す語彙が豊富であるが理知的推理的な能動的思考作用を示す語彙が非常に乏しい。單語も多くは具象的直觀的であつて抽象名詞の形成が充分でないために抽象概念を古來の日本語で表象することは、極めて困難である。この性質は單語のみならず文章や文脈のなかにも當然あらわれ、日本語の非論理的性格をますます強めている。

また日本語には關係代名詞がないために關係代名詞によつて、前出の語句をうけて、思考過程を、次第に發展させていく語法がないので論理的思考をすゝめる場合に極めて不便である。また形容詞や副詞が重層した場合、それがど

の語句にかゝるかを見分ける事も困難である。かゝる日本語の非論理的非合理的性格に思わされて、日本人は無意識のうちにおのずから論理的、科學的な思考能力の發達が妨げられているのである。このことがひいては佛教や儒教などの高度に發達した概念や知識を、受入れる際にもそれを古來の日本語で表現しようとしなくて外國語である漢學の性格をそのまま使用した。同様に西歐の學問や思想の概念を翻譯するに當つてもこれに外國語である漢學をあてはめて、在來の民族語即ち日本語になおす事をしなかつた。この結果今日においても日本語による、合理的理論的表現に向つての強い傾向があらわれていない。このような日本人の非合理的思考作用がそのまま日本の宗教思想のなかに取入れられて、その精神的基礎となつてゐる。

さらにシャーマニズムと呪術であるがシャーマニズムは、云うまでもなく、シャマン（巫者）と呼ばれる呪術宗教的祈禱者とその信仰する超自然的なものゝ依憑によつて、あるいは自ら興奮劑や鐘や大鼓などの、樂器による音楽や舞踊によつて、エクスタシー（恍惚境）に陥り、精靈や惡靈と戦ひ交渉する禮拜でありその分布は主として、極北民族のなかに見られるが現代においてもアジア諸民族の間に殘存してゐる。我が國も古代宗教は極めてシャーマニズム的であつたと云われ、大陸の高度の精神文化が移入される以前の日本の宗教において、巫女が中心的位置を占めてゐた。しかもこの巫女は、必ず威力ある何らかの神の血統をひいたものであると信ぜられ、世襲的であるために、この血統をもつ一系のものは、一般からは特殊の階級として畏敬せられ、時には部族の長となつて政治的支配者の地位についた場合もあつた。

このシャーマニズムと、密接不離の關係にある、呪術も我が國に古くから、廣く行われており、上代の精神のうちに呪力の觀念が明確に存在してゐた。例えば日本書紀、神武天皇紀に天皇が紀伊より廻ぐりて、大和宇陀に入らんとされたとき、敵が要害によつて、その討伐が容易でなかつた。そこで天皇は天神地祇に祈願をこめて敬祭された。こ

の狀況を記した文中に「嚴呪咀<sup>いづのふしり</sup>」と云う言葉が出ているが、この嚴と云う語は文字通り嚴重嚴格と云う意味よりも日本上代の用語としては神聖神祕などの超自然的靈能を意味するものと考えるべきで呪咀は云うまでもなく、言葉をもつてする呪術即ち呪文に外ならないものである。

またこれとともに我が國の上代において祝人として呪術を行う呪人<sup>かしろひ</sup>呪術師が存在していた記録は枚擧にいとまないほどで、この呪術とシャーマニズムが我が國の宗教の精神的基礎の一つとなり、今日にまで及んでいるものと云わなければならぬ。

このような呪術的シャーマニズムの基底の上に成立しているものが日本の大多數の宗教であり、佛教やキリスト教のごとき世界宗教も我が國に移入されるにつれてかゝる精神的基底から完全に離脱することは出来なかつた。ことに佛教は、我が國に傳來する當初から或程度民衆のシャーマニズム的呪術的傾向と妥協せざるを得ずそのために、このような信仰形態を頑強に排撃した小乗系の佛教は其の後餘り發展せずこれと妥協した大乘系の佛教が歡迎された。

### 第三章 近世における宗教思想の展開

以上あげた種々の精神的基礎の上に成立している、日本の宗教は近世に入るに及んで急速にその權威を失墜した。ことに爲政者の側からのゆがめられた保護と抑壓、不當な彈壓は、今日見られるごとき新宗教簇出の素地をつくり、現在見るごとき宗教的混亂狀態をひきおこしたものと考えられる。

即ち徳川幕府三百年の封建支配の體制の重要な支柱の一つはその宗教政策であつた。織豊政權による中世的宗教勢力の覆滅をうけついで、江戸幕府は武力を背景として諸宗教の統制支配を一層強化し、いわゆる幕藩制の確立とともに、諸宗法度が制定され、またキリシタン禁制の徹底化を理由とした宗門改め制、寺請制が創設された。また幕府や

諸藩には宗教政策を統轄するために寺社奉行がおかれた反面寺請制による、佛教の事實上の國教化は、寺院に本來の宗教活動を放棄して、政治支配の一端を擔わしめる役目を課した。

また禁教はキリシタンのみならず支配者の封建權力を、否定し既存の社會秩序や教義をおびやかす可能性のある、新義、異宗の組織や信仰、時には同心同行者の集會や組織もしばしば禁壓の對象となつた。このことは、一方では既存の諸宗教の發展をおしとどめるとともに新しい教義や教團の成立を不可能にした。即ち政治的權力による宗教の完全な支配と禁教政策と一方では、保護懷柔政策は寺院や僧侶をして、權力に従屬した直接的な監視者收辱者として、大衆の前に立ち現わしめることゝなつた。

また、幕府の財政難による寺社領の縮小と封土化は、寺請制による、寺壇關係の安定強化と云う特權を割引いても宗教教團の經濟的基礎を著しく弱めた。従つて、そのために諸教團はその經濟的基礎を、民衆のなかに求めざるを得ず好むと好まざるに拘らず諸教團は俗化、企業化の過程を、たどらなければならなかつた。こゝに宗教として、民衆救済の使命をもつ佛教教團の深刻な矛盾が深まつていつた。

このような佛教國教化とともに檀徒となり佛教信仰を強制された、民衆はその反面僧侶の横暴とその收奪職業化に對して、次第に反佛教的反僧侶的觀念を強めて來た。ことに江戸半期に貨幣經濟の浸透と商業資本の制覇による農民や町人の窮乏とともに一般大衆は、金銀の獲得や營利事業を、最高の人生活動とし、財貨を窮極の價值とする事によつて、金銀は彼等の世界や教理ひいては神佛にまさる救世主と考えられ、従つてかゝる時代に繁榮する宗教は、かゝる人生觀と契合する内容をもつ事は云うまでもなく、こゝに卑俗な現世利益を内容とする宗教の流行する、萌芽が見られた。元來現世利益的信仰は日本人の宗教思想の基本的な傾向をなすものであり、佛教のごとき、世界的宗教も現世利益宗教となる事によつて、廣く國民に信奉されて來たことは前章に述べたがこれに加えて、ます／＼企業化し、

營利を追求する寺社と檀徒に對して、過重な負擔を要求し支配者の權力への盲從とあきらめを説く、僧侶に對する民衆の反感と憤りは遂に嘲罵となり反抗となつてあらわれた。かくのごとき反佛教的機運の増大を意識して宗教による封建支配の莊嚴化に餘り大きな期待をかけなくなつた支配者はそれにも拘らず少しでも法度の強化によりその威信を保たせ、彼等の權力支持の一翼を擔わせようと計つたが教團僧侶と民衆との敵對抗爭反目は次第に高まりつゝあつた。

また一方思想的にも知識階級とくに儒者經世家などの學者達は、權力と結びついて、宗教本來の機能を喪失しつゝあつた、佛教に苛責なき、批判攻撃を浴せことに國學者は佛教やこれと習合した神道を憎惡をこめて論難してやまなかつた。かくして一般民衆の信仰は新しい救済の幻想と呪術的な、現世利益を求めて次第に新しい宗教や教團を生み出して行つた。

しかし佛教諸宗はとにかく寺檀關係の確立によつて民衆と密着し佛教のみに許された、特權として葬儀や法要を獨占し、祖先や死者の祭祀を強調するとともに封建的な、家父長制的家族道徳を農民や町人に説きつゞけた。大體江戸時代の風潮として儒學は武士や上層支配者の學、佛教は、庶民のためとする、思想が廣く行われていたので佛教諸宗の教義の通俗化と普及への僧侶の努力は、民衆教化の有效な方策として支配者の支持をうけた。ことに白隱のごときは難解な佛教教理を卑俗な裡言にかえて、廣く一般民衆の教化を計つたが、しかし民衆に對して直接説く佛教教理は自ら民衆の要求に應じた現世利益的呪術的な内容にながれ、例えば諸佛諸神の靈驗や、寺々の縁起、神祕不可思議な因縁ばなしとして、民衆のなかに浸透して行つたのである。

また佛教以外の宗教である神道においても、一部の特殊な神社以外は、民衆との結びつきも弱く極端な窮乏に苦しんでゐた。しかも幕府は一貫して神道の佛教への從屬を強制したので神職ははげしい反感をいだきながらも社僧に服

従し、その家族さえも佛徒として寺に登録されねばならず従つて、大多數の神社は佛教寺院と同様新たな經濟的基礎を、民衆のなかに、求めて教義を通俗化し、密教的な祈禱呪術の類を説いて民衆の要求に應じようとした。例えば江戸初期の江戸の町人吉川惟足の吉川神道、伊勢外宮の神官渡會延住の伊勢神道、朱子學派の山崎周齊の垂加神道などは佛教に對抗して、封建支配に迎合する神道教義をもたんとしたものであり、かゝる思想的發展に伴つて、神職側の排佛、獨立の氣運は江戸中期以後激化した。また江戸中期の橘三喜増穂殘口、吉田定俊等の吉田神道、卜部神道の流れをくむ神道家は積極的に神道教義の民衆化をすゝめ、幕末の神道復興のさきがけとなつた。

さらに享保末年丹波の石田梅巖によつて唱えられた心學は神儒佛三教一致に立つ卑俗な通俗的處世訓として佛教の説教とともに、幕末にいたるまで民衆教化の有力な手段として、一般民衆の現實主義的な、生活感情に融合して、京大阪江戸三都の町人の間に急速にひろまつていつた。

かゝる佛教以外の諸宗教ことに神道の普及とともに農村や都市における鎮守や氏神社の祭禮も次第に盛大化し、とくに都市では町人の氣概を誇示するごとく、その規模は莊大となりその内容は華美になつていつた。このような神道復興の氣運に乗じて神社は御札御符呪符護符などの施與販賣をはかり一方信者氏子を講組に組織化するなど次第に佛教の寺檀關係に似たつながりをもつようになつた。

かくのごとくして、一部の特權的支配階級と結びついた大寺大社は別として、大部分の諸寺や諸寺は、漸くその教化の對象とその存立の基盤を、一般民衆のなかに求めるようになったが、このことは必ずしも佛教を、はじめ諸種の宗教がそれぞれ、その本來の宗教性に立ち戻つた事を、意味しているとは決して云えない。それではつぎにかくのごとく期待され教化の對象となつた民衆は一體如何なる宗教を、求めていたであらうかを一考する必要がある。

江戸中期における商業資本の發展は幕府諸藩をして大町人の經濟的依存を、たかめ爲政者は漸く彼等の封建勢力の

動搖に氣付くようになった。かゝる傾向を促進したのはいわゆる享保改革の失敗とそれにつゞく田沼の失政であり、また、常に搾取の對象となつていた農村の小作人の窮乏化と都市での下層民の急激な増大はかゝる暗い封建支配のなかにあつて、新たな救済と當面する現實の困苦をいやしてくる宗教をつよく求めるようになり、古來からの民族的性格である現世利益主義と、神佛の人間化、人間の神佛化を著しい特色とする、俗信の流行が盛大化して行つた。

とくに農村の疲弊にもなつて離村が増大しそのうちから山伏、みこなどの雑多な宗教的浮浪者が續出し、流民となつて都市に流入するとともに、農村にはぐくまれた諸信仰をつぎ／＼に都市に移入し、それに加えて下級僧侶、醫師、遊藝人なども宗教者となつて、諸國を流浪するとともに、雑多な俗信が急速に各地にひろがつた。

かゝる風潮とともに、從來の諸佛諸神も都市生活の發展とともに、複雑な重層的様相を示し、機能分化をきたし、一定の性格と效驗が定まるとともに、これらの諸佛諸神は著しく人間化し、人間と同じ苦惱や欲望をもつものと考えられるようになり、ことに地藏信仰や觀音信仰にこの傾向が著しかった。

かゝる俗信の布教者運搬者であつた雑多な宗教業者達は、幕府の定めた正規の教團の統制をはずれた存在であつたために、幕府はしばしば統制をはかり壓迫を加えながら一方では同時に彼等の果す民衆教化の役割を評價して、或程度の保護と特權を賦與していた。これらのうち最も活潑な勢力をもつていたものは、いわゆる修驗者としての山伏と巫女であつた。元來山伏は最初は修驗の徒として、諸國の靈場によつて民衆教化に大きな役割を果して來たが中世末以後は、藩領の枠からはなれた遊行者として特權的存在であつたが江戸幕府は、一六一三年（慶長十八年）山伏法度を設けて統制を行つたが當時にはすでに占いと病氣直しの呪術的祈禱が主な活動面であつた。また巫女はいわゆるみこ、いちこ、くちよせと呼ばれ、生靈死靈の媒介者として神がかり状態において、病氣を治療したり死靈の言葉を傳えたりするのを、本業としていた。



そしてこれらの宗教業者達は、稀には民衆の日常の相談相手となり、時には民衆運動の指導者の役割を果たしたのもあつたが、その大半は荒唐な説教や金神キツネ先祖死靈などのたゞり、因縁ばなしで民衆を惑わし恐怖心を与え、甚だしきは詐偽たかり強迫を行い民衆の寄生的存在にとゞまり新教義の創造と云う意欲も民衆の精神的困苦を、救済しようとの意志も全くなかつた。

この外近世民衆社會で發達した信仰組織に講がある。講は元來佛典講説の集會を意味したが、漸次靈驗あらたかな、社寺靈場參拜、またはその維持のために奉加、寄進を行う講社に變化し、時には頼母子講薄團講のごとく、資金資財調達のための經濟的相互扶助を目的とするものにまで分化發展した。ことにこの講組織を利用して、各地の靈場有名社寺の參拜を目的とする民衆のリクレーシヨンの意味をもつものゝうちで有名なのは伊勢講、觀音講、大社講、行者講などのごときものから漸次全國に散在する、諸靈山の登拜信仰にまで擴大され、ことにこの山岳信仰として著しい發達をとげたものに富士山と木曾御岳の信仰がある。いわゆる御岳講富士講であり前者は後に御岳教に後者は扶桑教實行教の新宗教にまで發達する。

かくして、江戸幕府の失政の連續と抑壓の強化によつて、民衆の生活がますます暗黒化するとともに既述の雑多な俗信仰のなから徐々に新しい信仰が生れ、漸次有力化して來た。そのうちには禮拜對象を人間化する靈神信仰や宗教的素質をもつ普通人が異常な超人間的靈能を示して、活病授福開運世なおしなど民衆の種々の欲望に生きながら、神として應える生き神の信仰、教祖の信仰と展開して行つた。

兎に角幕府は、享保以後、しばしば荒廢と窮乏におちいつた農民や町人の反抗を、禁壓するために重罪をもつてのぞみ、また強大化しつゝある商業資本の制肘と民衆からの收奪強化を通じて動搖した幕府の權威と、經濟的基礎を建て直そうとはかつたがこの企圖も數年ならずして、瓦壞してしまつた。しかも大鹽の亂など幕府の基礎をおびやかす

反亂が勃發し、幕府は老中水野忠邦による天保改革を斷行した。かゝる時期を通じて、民衆の宗教にも新たな展開が見られるようになって來た。

すでに述べたごとく、江戸時代後期の民衆の宗教思想の特徴は一方では反佛教感情の高まりであり、他方では現世利益的呪術的宗教信仰と禮拜對象の人間化であつた。反佛教感情の高まりはついに民衆の佛教嫌惡にまでなりひいては超自然的存在の嘲弄や死後や末世觀をも輕視する傾向を強めた。

ことに生きた人間をそのまゝ神靈を身に帶びた生き神生き佛として、禮拜の對象とする信仰はこの時代の宗教思想の著しい特色であつた。

また民衆が既存の秩序や權威や支配の枠をはなれて、直接自ら宗教的權威をふりかざして、庶民的な宗教行動にうつつた例としていわゆる「ぬけまいり」「おかげまいり」がある。かゝる現象も當時の虐げられた民衆の爲政者に對する一般の抵抗であり封建秩序の解放や各地での打こわし年貢輕減と借金棒引き、役人への集團的反抗などすべて、支配者に對する宗教に名をかりた一種のレジスタンスであつたと云える。

しかし、相かわらず傳統的な神佛の權威をかりて、その支配權を維持しようとあせる幕府は民衆的信仰の展開と信者組織の擴大が現存の秩序に批判的な邪宗や新義異宗と結びつくことを極度におそれ、これらの教團や結社にはげしい彈壓を加えた。しかしかゝる彈壓にも拘らずキリシタンや日蓮系統の新宗派やかくし念佛祕事法門など幕府の權威を脅かすとき祕密結社の新宗教や諸教團が簇出した。

かくのごとく、支配者から抑壓され、下層の民衆から輕侮された佛教を主とした、從來の既成宗教や諸佛諸神の權威が失われ、その宗教活動が停滯したこの時代に、眞の民衆救済の宗教的要求を充足するものはかゝる既成の觀念の枠から外れたものゝうちから求められねばならなかつた。こゝにおいて、民衆的な宗教思想をふくむ教義内容をもつ

た創唱の宗教が徐々に胎動をはじめて來た。ことに我が民族の宗教的心性なる特定人に對する絶対歸依の感情と、しかも生存者そのものを生き神生き佛として信仰する傾向は、徳川幕府解體期において、この生き神を、中心とした新教團の發生を促した。しかもその教義において呪術的要素と現世利益を標榜した、新宗教が發生するようになってくる。即ち黒住教、金光教、天理教などはこの時代の要求にこたえて生れた新しい宗教の一つであつた。

## む す び

以上こと簡單に日本人の宗教思想とその精神的基礎及びその展開の著しい近世を中心として、考察を試みたが限られた時間と限られた紙數のため充分その意をつくすことが出来なかつたがはじめにのべたごとく、日本の宗教の實態をあくまで客觀的に把握して、今日の宗教的混亂狀態を整理し眞の正しい宗教を見出し、宗教の面から日本文化の進展ひいては人類の、福祉にまで貢獻しなければならないと念願するものである。

自然科学の異常な發達は人類を、一舉に滅亡させることの可能な段階に達した現在、宗教的ヒューマニズムがますます要請されるべきである。今日の日本の既成宗教の非活動と、新興宗教の非ヒューマニズム性は現代のこの切實な要求に果して、應えることが出来るであろうかを切に憂えて筆を擱く。

(一九五八・九・二九日夜)

## 参 考 文 獻

三枝博育、鳥井博郎 日本宗教思想史  
渡邊様雄 現代日本の宗教  
小口偉一 日本宗教の社會的性格  
東成出版社 新興宗教の解剖

河出書房新心理學講座 宗教と信仰の心理學  
佐木秋夫 創價學會  
小口偉一  
佐木秋夫、思想第四一〇號 「神佛の信心」の内容と性格  
創文社、現代宗教講座第五卷 日本人の宗教生活  
南 博 日本人の心理

中村 元 東洋人の思惟方法（第二部）  
和辻哲郎 人間の學としての倫理學

倫理學（上、下卷）

川島武宣 イデオロギとしての家族制度

日本社會の家族的構成

辻善之助 日本文化と佛教

宇井伯壽 日本佛教史概説

橋川 正 日本佛教史

家永三郎 日本道德思想史

瀧川政治郎 日本社會史

中村吉治 封建社會

日本社會史概説

日本社會史